

週刊 SSH (7月20日)

## ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム

東京大学の安田講堂で「戦後80年 被爆の実相を語り継ぐ」をテーマに、2024年ノーベル平和賞を受賞した被団協代表委員の田中熙巳氏、元軍縮会議代表部大使の高見沢将林氏、ジャーナリストの堀川恵子氏、広島市立基町高等学校3年の高校生平和大使の甲斐なつきさんのお話を聞きました。



今回のノーベル賞フォーラムには、被爆者の方だけでなく、原爆についての本を書いている作家や元軍縮会議代表部大使、高校生平和大使など、原爆や平和について様々な視点で意見を発表し、話し合っていた。その中で印象に残ったのが、元軍縮会議代表部大使である高見沢さんとそれ以外の方とでは、平和に対する姿勢が少し異なっていたことだ。高見沢さん以外の三人は、『核兵器はなくさねばならないし戦争も絶対にしてはいけない。力に頼ってはならない。そのために対話が必要なのだ』という姿勢だったが、高見沢さんは『対話するにも力が必要である』と言っており、理想と現実のギャップを改めて感じた。これは、実際に軍縮会議に参加していたからこそその考えだと思う。今、世界情勢は非常に不安定であり。いつ他の戦争が起きてもおかしくない状況だ。だからこそこれからの世界を担う私たちは、問題ごとを対話で解決しようと努力し互いに歩み寄らねばならないし、そのために世界情勢に目を向け、自分の意見をしっかりと持つことが大切だと考えた。

最初に登壇された日本被団協代表の田中さんのお話が特に印象に残っている。わたしはいままで原爆は恐ろしいものだという認識はあったものの具体的な話は聞いたことがなかった。田中さんの長崎での体験談はとても生々しいもので、目の前にその光景が広がっていくようだった。この講演によって二度と原爆を投下させてはならないという思いが強くなった。

他にも元軍縮会議代表部大使の高見沢さんからは戦争や原爆の歴史、ジャーナリストの堀川さんからは広島県にある原爆供養塔について、高校生平和大使である甲斐さんからは平和大使の活動がどのようなものか伺うことができた。どの講演も新鮮な内容で、平和について考えさせられる貴重な経験となった。